婦女八賢誌

四編

三

へ13
2913
12

貞操婦女八賢誌

江戸　狂訓亭主人編次

利田

第廿三回　樹間の草屋會四賢女　老婦の赤心餞別一箇

再説青柳八代ハ於安ふ跡を振り任せて大六が館を立出て室ね
さやめて往わども稍村もづまふ来し折しもひと叢茂りし木蔭の
隙より立あらハれし一人の處女先ふすゝミし八代と顔見
合せの小声ふて「八代さんか」八「お梅さんか」梅「ッテ大六の
館の都合ハ」八「首尾ハ宜ふ上て言即ち宴ハ青柳さんぜトよ

へ13
2913
12
特

昭和九年七月十八日

見た跡より青柳が　青「お梅さんでござんすか扨もくトいひかけて
互ひに涙さしぐむハ流石婦女の情なりけん要時はなれし青柳ハ
二個に對ひて容をあらため　青「那大六が邪曲より死失の淵に
因へまで迚も遁れぬ命とハ心で覚悟を極めますれど恩愛
結び義をうけしお梅さんに富う一度會て言ふこともあり
聞くこともあるものを這侭死ねとハ口惜しひと思ふ念の届ひてか
今夜はからずも皆さんの救佐に非死を遁れし上浮木にあひし青
亀よりもまだも得がたい僥倖と思へバ命をあげうとて此恩報じハ
せしませぬ夫につけても不思議なハお梅さんへかゝし頃迄摩まで

豊湊家へ亡父の汚名をいがなさんと首途なりし其日よりいまだ
幾程も立ざるに古御へお帰りなりしのみか二個さんを伴ふて私の
必死を救ひましたれども心に解せませぬ此猿ハお身に入りましたか亦ハ
いかなる気がかりな事を聞せて下さんせト問へばそお梅ハうち点頭一其
疑ひハお尤理なから是にハ種々子細のあること從愛ゆゑハ從来ゆへ長
話語もならしならぬ狭くハあれど那する小家へ　青「そんなら其所で
緩々の話語を　八「言ふより聞くがいゝしませう　梅「サアござんせト八代治
梅先に立まつ淺にて林の中に入るほどに五十歩ばかりにしてあめしけ
かる白屋にぞ至りける其時お梅ハ先へ立を置門の戸引あくれバ

内にひとりの老人ありて最まめしく応答なぞ青柳も八代もつく
ゞと一間へすゝみ入る封況老女ハ火桶を運びいろ〳〵茶をもてなすなど
ちらにお梅ハ青柳に對ひてやゝやう 梅「最前おはなしお尋ねの藪入が
身の上ハ語らべるハいかなる其後ハ筍悩くト彼鎌倉にて花の
方が錦の旗を江戸城にして諸人に参詣をゆるさせ聞つたへて
小船にのり船楼に絃を登りて旗を取らんとせしをりから
八代ハ組發して滑びて小船に落しを其後片瀬川へ流れ来り
たちぎお安にたすけられし身の上を明せしに八代ハうちさきしおる
身もとハ菊絵と彼神主の子孫なが尼公に宿園のなき

既に男谷を見示し 喜「夫につけても残りおしいハ折角手に入錦の旗
旗を取りし時の同の勝人らしき似ても似つかぬその小包ト云うて腰に
つけられし小包を殊に大事 梅「扨中々ハ後の片袖が這入つてある
ゆゑありし第一なかなかにもならふかと思ふべき今に捨も出ぎ携へて居り
ましたが其はともかく詮なひ事ト言つゝホツと溜息をつく 聞て青
柳ハ殊に喜びはまた驚きつゝ 青「夫へおいたいの旗の事ゆき出し
濁く虎隠妹等に邂逅なりしへ是もまた自他の幸福なら
及ばん シテ又私の在所と神宮の家の大恩を知りよく
知りて此程に佐けて下さんしき 私が内と言ひし後にお梅さんの

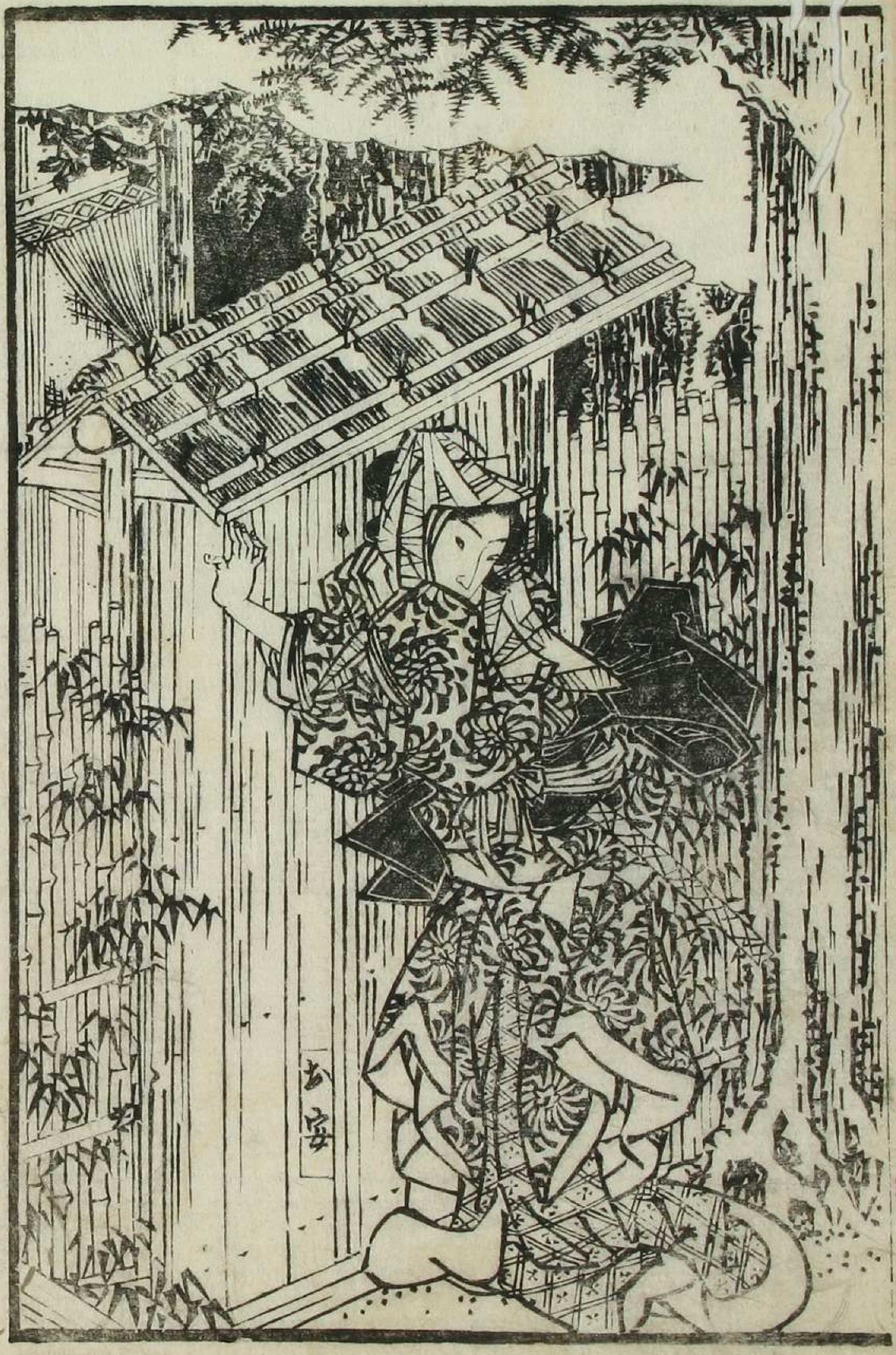
在家も淋しく見ゆる栖は由井蒲原の里客はお茶を[illegible]
扇(?)の田子ハ名ハ多く松原帰りておぎんせん松にも蔭では類なし岩(?)
松の内にて知らせて足る人なりて其(?)の事けを聞まし十五日まで
八代小鷹をさしめ今[illegible]様く子細のあるける顔佐瀬川の
小船に棹さしお安さんと諸倶に東海道なる富士沢の沢ぶりして
岸に登り夫より岳路を急ぐかどに翌日の黄昏須走(?)の里
近き神宮浅原へ参りさき御に降公をむら雨を要時さけんと
立寄りし木影にひとりの老婦に遊びし基よりお梅さんの
己にぞ遠回神宮の騒動とお旅の[illegible]前の栖よまで簡略と

簡略を説示し夫につけても元舎夕ハ折角自ら入る錦の小袋(?)
いつの程かの[illegible]皆く是似ても似つかぬ此小づ(?)を言ひつ腰に
付けりし東色を取り出し中には遠の汗袖が入ありて次つゆゑ
若菊一盞[illegible]の夢[illegible]思へバ今に稀も甘き携
て居るもの今まで苦中の苦を凌び命につけて取久廿し
血縁を洗くも[illegible]皆く是言甲斐(?)[illegible]と人さんに思わずきえ
雨の身背樹さんに取つけて松井田宿ならず[illegible]と世に
亡親の遺言まで仇(?)人しものをと口惜しくも腹立しくも存ん
よう今は言へ今さらに百千度悔とも詮なき吾[illegible]の不幸[illegible]六

猪之介の助しけるとぞ願へしと始終を聞て貴翁は感ありける将
須臾湍息ついて居たりしが思ひ久しくてお梅に対ひ大変の
此様をうしなひしハ最も本意なきなれど過世の縁なるべし
両女に邂逅しも不思議の倖ひ今より四個が心を合せ隈なく
尋ね求めなバ敵人を何ほど遠くとも先に問ひ出べしお茶の
養家の騒動と吾倅が知縣へ捕はれしをきゝし七知川でござん
なると言ハ八代小藤を找め甚疑ひハ有るなれど月外
腰誠を立来りてより公儀へ家路次をいそぎて其次の月の黄
昏に此灵塚に近き所しも俄に降出せる雨を雲時さけんと

立寄りし木影に計らず出會し老女お梅さんと六知己に退出
養家の騒動とお茶の難儀の一伍一什簡短に報知れて
猶く中にもお梅さんハお前ハ素よりお竹さんまたお神さんの
変さんも揆じハ憐とお主人ども他に恩揆もあるしにと言みを
お梅ハ語をついて其折會し老女とのおハお前もうれしく噂に
聞く長堤の孫三が実の姪夫なる吾們三女を最会頃に慰
めて此家へ密かに伴ひ来お前を救ふ相談にさまざま心を労
せしかども吾倅へ汲茶と姿い異なれど知縣の鑿義厳しければ
昼ハ里へも出ず変性つゝ八代さんとお安さんのゝ終日四方を

青柳と救ふて
三賢女
金沢に走る
八代
青柳


お安

夫聞て簾の格子を窺ひしに心に浮む変ありとて一ツの奇
計を新作意その次の日よりお両女ハ仮に神尼と身を出つ
せしに終に謀計其跡に留り今霄の本意を遂らましを
皆お両女の方すよりらくを出せる折ありと聞てよろこぶ青
柳ハ居のき情を感じける斯須ありて青柳ハ嚮にお梅が衣
出せし帛包を打ひらき中なる綾の汗衫を左視右視しく
稍かし氣に稍うち按じて居たりしが心に思ふよしやありし
けん完尓と笑つく折ふし頻にお尓ハの此汗衫を見とれ経と
すれバ其盗人も大かたハ心当りがござんすとてお梅も

八代の膝のきずを覚へね まずに青柳の額うち守りて
梅へ 紛の格子へ知らせしが此尼神が身がわりへ太奈紛なる
子細ぞ教へてト問ば其方も膝おしすすめ 青「サテその
まけハ長いことなる頃七月の中の五日お前が菅途ありしより
四五日を経るわざに お袖さんへ参にきしに お前のそのの男
ぐらし七経に お張に [illegible]まど月の末の五日に湯が
鳴の祭礼を見物なりよせて箇様この簾ありしそのとき
社を湯立を見んとて湯が鳴にいそしにも簾まくし跡
自らべ本意多く思へ慶り居丸塚山へ奉しときに臭へ入り

よしそく霄円の本の間をもつて聘り渡るわしも向ふにかや
あまき人影椽子に大谷ゆき寵ふにいつくのうりなりしを彼お張が
お袖をよびへすごすにあくる條より仙女真弓がお張を殺し
お袖と名乗りなへしより国お袖ハ真弓が実の妹なりし事
その父のかりかのうりお袖が八郎爺真弓が至孝なるに真弓ハ孫
の血縁をもて父の仇なる扇が谷を狙ひ撃せんと思ふによう
お袖が望みに応ぜざりしよう其時青柳ハ錦の血縁より復
まんとて真弓と挑み戦ひし折なりけりてお袖を深谷へ落
せしめ夫より猶もゆくそひしに真弓ハ不思議の術なりて

小笹の中へ飛入りしまま影を隠して洞の木に見へざる其所に覗を
うしなひしかバ独り弓塚へ帰る道にて鉄八に行会ひて神
宮の騒動を聞しゆゑまた如此くにそうひてお竹を鉄八に
委ねまず其身へ弓塚の家にのこりんとせしに大六の為に
捕はれしその事の終りまで一伍一什を物語り「其後
鬼塚山にて神女真弓と挑みしと死ぬうしろに見留し後の小袖に
すがる後ろね此元袖ぞうして見まべ那血縁へ入りつひ真弓が
うがひしを夫とそもそうらまぎと聞てお梅も八代も側へ寄せし
老女さへその英才と明弁を歎賞するのみ又まへに思ひ兼

ゐて居られけるそが中に八代ハ心ありてしずやかなりけん思ふを
小膝をすゝとせ 八へ青柳さんのお話品で思ひなへせらるのが
おぎんもその子細とまをし其にへ私がいまだ含が合の一義に
深とめて居る時分十六七の一人の娘その名もさしかお道とや
錦の縫殊を奥さまへ進るを切にお側つとめを願ひの早ず免
許ましぬ基より理髪の娘ゆゑ奥さまのおゐにに入りて
交る思ひ一首つゞきて那内戸帳の廊櫻そふして見るとお道と
やらんまでも仙女真実ならぬで此縫殊をおくりに含が合へ道寄る夜
深でおぎんせう卜途に夜中を語り合ひ稍時うつる折こそあれ

外面の方より声高く「遠所へ男塚の里ちかき其所舘への使
おそまきを急げ此しへ権太ーと言つゝまて遠く行く先く程く祈し
門の戸おし明て遠方へ入来る婦女あり是則お安なり其時
お安へ人々にうち對ひて完命と笑ひ「私が今ハ大望を
嗒腹立ず思いんせうが宝であんまりあが説洗して事一追
人のうらむ時ハ後悔先に立ずとし古へ言ひおかし語さんが
敏く心得てハおぎんせうあれども智者なれど一夫として其所を思へ
那様に驚かしとも隔ねいらあれども悪しう思ひんまよト言れて
佐り婦も落つきてお安が孝を感じつゝ黒へ笑ひを催しけり

其中に青柳はお安に對ひて容を正し 青「最前は身繁くて
再生の御禮さへろく〳〵申す隙もなく 其侭にしてをりまするに
今宵の此度は生を變ても お姉様へ知らし申せんト お安が
聞あへず 安「互ひに命恩あるものを救ふのも救はるゝも頼母
づくで おぎんさまあのを恩の義理のが入るものでト 語るさお安が言の
葉に青柳は尚感佩して 楽しきこの思ひあつく して
又言ふやう 青「ある訓私と八代さんが邪鍵を産みにた跡お寄に
掠り任せ 其侭實人まゐる跡にて 故郷へおぎんさんせねば
むかうで おぎんさんしるト 言へ お梅も 八代も 大勢ともに尋ねる

此ぞお安は聞つゝうち点頭 安「那時跡へ引殘り二個をその
場で打倒せし後は柱へ縛る者もなけれバ 御前方におくれまいと道を
急ひで此家の門へ來て格子を窺へバ皆さんのお話最中ゆゑ
ゆゑ 態と這入らねへお話の腰を折んも如何と 又表へゆへ
追手の者がもし來らんも知れねべ その要心如何も思ふにゆき
外から委細のお話を今まで聞て居りましたト言れて皆々
感歎して最頼母しくぞ思ひける 作者曰お安が十字の家へ来る処を 笹原より曲者の出て お安が殺せしところの
見しことは既に二の巻の末に委しくさせども此処にてはお安へ [illegible] 詳らかなり
卻説 此家の老婢は
節婦の明論義談を聞毎度 且驚き 且感じつゝ歎賞

まゐのミいまだ一句も出さでありしが此時漸く彼方より膝を
すゝみて四女に對ひ 老「貴婦がたのお話説へ私が口を出しま
すハ片腹痛うござるが私の在所ハ鎌倉に程遠
からぬ金澤の瀬戸といふ片田舎にかくれ消光て居りまし
たが夫ハはやく亡跡へ残つた二個の娘お理喜お友といひ
ますをたゞひとりで育てるうち縁ありて娘ハ當ある大家の婢
女づとめ首尾のよき優律に瀬戸の家をバ他に譲り一人の
弟を公當に此ほど家へ引移り纔に一稔をへるうち主家に大
變さし起りてちりぐになりくに身を行まひ二個の處女の
行衛定らず和泉ざかに居りましゆゑ案じ煩ひ老を便りに
此頃風の便りを聞バ娘等二個ハ汲み住居し金澤へ身を
潜めけ細き煙りを立るよし夫ハ私が思ひ付ご貴殿方の
お身の潜伏今お話の様子で錦の御旗の盗人も鎌
倉うちに居らん必定さまして見ると鎌倉へ忍んで御旗を
尋ねる更ハ金澤へよい隠家ありし此程ぞ私の猿智恵おうしる
婆とお笑ひなく若お心にうなひしあら認めまさせ參て娘等に
お談しあらバ急度お世話をいたしませうト言つゝ座側の筆を
硯の中より公の真実巻ある一條を手ばやく認め

お梅が傍に在し眞菰見ゆる六台の菓を四婦へ潤して饒舌感し
お梅は盆を取あげて 今にさびしきね お茶の深切なお言葉に随
がつて見らば直に金澤の瀬戸とやらん尋ね行二個の冗に會らく上
行ものをすゝめ冗婦さん 青「さりとて其が宜らむおばさん 「さん
直に讓立の老「用事へこゝにおばさんまでト 言つく取出る竹皮草鞋
八「わらじがまで穢目の事ひ る「お梅へ言話は居ませねト 言つく
皆婦立ながら草鞋履もよびしくやがて戸口立出るを
止めかねる老女より四個も名殘のおしまるゝを思ひ直して 菅
笠に隠も涙の露草を踏みなづら足早に南をさして辿り行く

第廿四回

清水を汲で義婦短刀を拾ふ
月夜を走て孝女孤忠を聞く

武州久良岐郡六浦の荘金澤へ大道村耕地の西往来の右がたに
ある岩石に切り付たる地藏の鼻筋をわけて西を相州東を武
及とも故に鼻わけ地藏また二界の地藏ともいふなり鎌倉志に
陰陽推歩圖及び東鑑を見るに六浦は鎌倉四境のうちに入り
たるものにて四境は則鎌倉との境をいふなれども元何れは金
澤は武州にして相州にあらず昔實時顯時居住ありてより
ありて一郷の名として金澤を家号とするも此時よりのことなりと

なり今まの編に瀬戸の地を中央にとり是より次第に東西南北
村々及び名所古跡をしるすものは明神の勧請諸社は山の上にあり
瀬戸の明神の本より西は六浦村大道村三艘村北は金沢谷村
谷津村南は野島村東は洲崎村町屋村寺前村小柴村富
岡村中里村氷取沢村是をすべて金沢十二ヶ村といふ其外は所々の
小名あれども一村のうちにて亦むかしより遠金澤の西湖の名を
ひろく世に其誦せる詩歌も彼瀟湘の詩歌になして其作者は歌を
藤原の為相卿詩は唐僧瑩玉澗より其風景に比せる名称は
小泉の夜の雨とし。洲崎の晴嵐乙艫の帰帆平潟の落雁

野島の夕照称名寺の晩鐘。瀬戸の秋月内川の暮雪とす。此
外に四景あり。瀬戸の二橋金沢山の春花海上の落花能見堂の
画すべて是を十二景と言ふなりと云 金沢名所の見えよう
まいれば四方の桜は咲乱れまんまんたる蒼海織なる高山春の時しも弥生の
景色を持するはなく景の寄のひろき松は霞たちて釣する扁舟
漢西にてもよき眺望一時に尽しがたしさるゆゑに梅青柳
等の四賢女は君塚の里をめぐりてよろしき第一の最に
ねべ名所古跡を扮覧なして其うちには錦の心のそみかるも
あるべきなりと思ひて行ものから是などと思はるるなく翌日申の刻

まづさるころ同國金沢なる富士坂を越て能見堂の辺へいたりしが
要時遮堂に立寄りて四方の風景をも一覧し且ハ遠路の
疲労をも休めんと思ひにけれバいざとて四壁諸個に堂の檐
椽に腰うちかけ遮絶景を左右と余念もなく詠めて居り其時お安ハ
彼辺より進み出て人々に向ひ「いかんまア景色の見てよござんすには
漸うしく思ひ居りましたに其子細ハ他でもなく松が今ごろ此
跡の富士坂を通るとき汝まりに咽が乾くゆゑ清水に口を潤させると
道の片側の山水を手にむすびつゝ呑んとするとき那方に落し
小草のうちに一振りの短刀あり不思議に思ひ身を伸して取り
あげ見るに表装も拙きものと見へざれバ様子ありてよく見れバ
長さハ尺にたらねども様君羣の鋭刃白らんと思へバ流石に捨
かねて落たる物を不拾と聖の道ハありと聞けども態て持んハ
無益なり今まし当川で青柳さんの身に寸鉄もなきものを
此短刀の主の出るまで須臾此方へ借りうけて今まし当る用に
充んと思へバその侭携へて即実にト言ひつゝも常のごとくの叙り
出し青柳にさしだしぬれば衆皆聞て欣喜感じ今にはじめぬ[illegible]
斉戈を歎賞のかぎりけるその中に青柳ハ悦びの色面に顕はれ
稍短刀を請うけて幾回も戴きてつくづく見て不審気にお安の

辺りへきこへぬよふにて 青「何様も不審な 此短刀を見ておくれ
もちろん無銘なれども 長船也 切尖から一寸ほど 鎺の中の鎺に
おぎんさんが 欲ト問へばこそ お安は驚きながら 「あれやどお家の元に
ある通りの此が おぎんさんが たとへ何様して 青柳さんが 青「サア
夫れへいろいろ子細の有る 私の實の爺さんは 丸塚さまの元の
老臣菊坂小六といふものでござりまして 加古の戦ひ破れて 御家没落の
その折ハ 爺さんの亡骸に及び 私を側へ呼び寄せて 遺言なさるゝ
其節に 此短刀のありかは 云へ申すとて 公に差出し 時分
兎も是短刀は 基丸塚家の重宝なりしとて 爺さんより三代先なる
菊坂嘉門といふ人の時 軍功によりて 拝領致せし家の重宝
にして 幾年月を送りしに お家没落の其の後 嫡子孫の為に ゆくゆく
身を沈め 爺さんの休役の折 短刀をさえ 取りあげられしに 何人の
手に落入りしか 其後行方は知れませぬと 残り惜しく思へれ
何や繰り返してあひしに 今ならずとも お安さんの志にて 私の
身に入るは 千万金にもまさる賜物 有難いとも嬉しいとも 言ふ
物へ おぎんせぬト言ふ門く 伏拝 青柳の 公をさし出て お梅なるも 傍に
眉をひそめきける 却て 物語りをきしろふ 又もや 余浪におしうつり
先づし疲労をやすめ 居り 其時 八代ハ 四辺を見まはすとに 堂の

八代
小梅
青柳

能見堂に四賢女
風色を観る

彼方の小高き所に遠眼鏡を掛おきて覗ぐる人あれば放に見
ゆるよしを書付なりしが戯れに立寄りつゝ遠眼鏡を引よせ
見るに間近き麓路より七山門草木のみなくさらく人家に
の立るまで手に取るごとく見へにける彼る折しも宝蓋の里など
上着にまとふ菅の小笠を手に持し旅装束のひとりの麗女
洲崎の街を遠方へと歩み来るなりけるが八代へ公と熟く
見るにそうふんや那扇が谷家に身を寄せし お道にてありければ
瞬もせずと猶よく見るに終に姿へ木陰まで往方も知らずなり
にけり跡り惜しさへ限りなけれども斯て其方をながむるにお梅

青柳お安ぞには首振こと物語るにぞ ゆめて歎息して
もし見ゆるかとうろうぐ立寄りて覗き見れども彩ならず見ゆる
するけれど終に望みを失ひぬ折しもあまた青柳へ訪ひ来し
とやありけん人々みうち對ひ 青 お梅さんや皆さんへ御権お息ひろ
知らるゝが実や林麓の街まで遥の程とへ言ながら心を掛
為ぐる若其人に逢ふぞの手にひとつもなくらうも知まじぬ
是みて思ひ合すと見べ最早巻の風奏に合が八谷の殿さまが此
程鎌倉へ在宅あり今日しも新領のゆありて当所総名え
参詣なるよしを承りて見ると お安さんもあくらつきうちて徘徊し

汝ハ世を去し際を覆ひ爺さんの怨を復し埋ミし家を起さん
と謀る事のありしとも言たれど然人言人さまにお虎さんへ一旦
花の方の奥勤を許容さましうゑらふへちつくらつそうりを旅
装束で出行あやんを笑へるひが足ゆへ子細のかるそりうそまとう
からぬゝ不審あしかへ急ぎおまま林麓へ参り若仇打の様子かへかば
余所ながら力になり申さんで何かの事をまへあるなどお前の
お音の通り宴で彼是気を揉より必もよなく林麓の方へ
サアおざんせトお梅が言葉離れ一議に及ぶべきよふもなく即
時に同意して能見堂を立出て抹ぎきして出でゆく不題花の
守の奥へ立入し那お虎ハ定正に近寄て父の怨を復さん
おもひし田婆も彼の波に船楼をながき通御祖の行衛も
知されば花の方ハあちらのうちに深くお虎を慰めの其日
帰雑のかると重信お虎を若に與申し今日の始末を云と
言葉短く言ひきせ世祖の行衛鑿儀の為とて身の暇を
賜りしかべ甚所に望を失ひしかども歎詮方のなき儘にその
夜初更の比及に合が谷の館を出て兼て心を合せたるお理喜
於友等の妃嫔が住む金澤なる瀬戸をさして足を早めて
行かどに名に吟へたる朝比奈の切通しもやや過て大道村に

来し頃ハ稍子の刻なぞ近付ける斯る折しも後方より窺ひ
くく来る者ありて辺寄る侭にお辰の袂を引止めつゝ小声に
なり「お辰さまでハござりませんかト言ハれて驚き振かへり
木の間をもれる薄月に顔さし見て完尓とゑみ「誰かと
思へバ其方お友が能しも今頃此処をどうして「ハイ此ハ御番へさがる
ならバ兼て貴孃の仰らる鎌倉の地を徘徊し賢女に會合
ますべき理を説て味方に招き合が公家をおかし国那
さまのお祭ミを久しきやへ参りかと奴婢などを合せまして今
日も那辺這辺まへりし帰途暮に及んで勝戯より片瀬川へと

来かゝりし時箭筒怪くのぼりしト那お梅八代が船嘗より小屋へ
籠入り片瀬川まで流れ来しをお安にさまけられしそれより
御旗の由来神夢の不思議まで貴お梅八代お安等が身の上一
とをまでも立聞せしその跡ゆて此旗と片袖とをわかへし一伍
一什を物語り「よく聞の通りの子細なれバ那お梅等の三輝を
味方にすれバ貴孃の片腕千万人の士卒より頼母しかりんと
思ひしゆゑ折を見あわせ言ひ寄らんと姫ハ直さま其場を
婢の跡をつけ私ハまた此旗を折を見合せ二人ともそなく貴
孃にお渡ししまたその只今帰る此道でお目見へるとも不思

儀なる僥倖シテまた貴壌ハ何級にお供もすに家中町辺を
お歩行ひろくへきト同じまでお屋もありしけども落もなく喜ふま
ゆゑおもへまきりに歎息しつくお屋の繁華しきの最便なくぞ
思ひける

村田

貞操婦女八賢誌